＜報　　告＞

中央大学保健体育研究所講演会

日　時：2015年６月22日（月）

講　師：岸　　卓巨氏
　　浦　　輝大氏

テーマ：スポーツで国際貢献できますか？
――オリンピック・パラリンピックに向けた
日本の国際貢献戦略――

スポーツを通じた国際貢献について，日本発のスポーツ国際貢献事業「Sport For Tomorrow」運営事務局で活躍される岸氏と浦氏をお招きし，御自身の体験談を交えながら御講演いただきました．岸さんには，2020年に向け，どのようなオリンピック・パラリンピックムーブメントを起こしていくのかを，日本政府が現在取り組むスポーツを通じた国際貢献の成長戦略についてご説明いただきました．また浦さんからは，そのような成長戦略の中でも，見過ごしてはならない途上国特有の「現地の論理」とは何なのか．日本のような先進国とは異なる「生活ロジック」を有するバヌアツ共和国での様々な体験を通じて，体育の本来のあり方は何なのか．スポーツとは何なのかという，身体活動に対するある種「根源的な問いかけ」がなされました．日本に暮らす我々にとって「当たり前」のような体育やスポーツへの考え方や感覚が，実のところ日本独自の価値観であって，決して人類普遍のものではないということが語られた点において非常に示唆的であり，両演者の対称的な視点（マクロとミクロ）をもとに，今後のスポーツを通じた国際貢献のあり方について会場全体が深く考えさせられる有意義な講演会となりました．

保健体育研究所企画委員長：小林　勉

司会　お願いします．

小林　でははじめに，本研究所所長であります文学部教授，布目先生よりご挨拶をいただきたくお願いいたします．それでは皆さん，大きな拍手でお迎えください．

布目　ご紹介にあずかりました，布目でございます．一言ご挨拶させていただきます．本日の企画は，中央大学保健体育研究所主催ということで，学内の関係者のご参加が多いのかと思いますが，簡単に，本研究所の取り組みについて説明させていただきます．

中央大学保健体育研究所は，1978年キャンパスの多摩移転と同時に，学内４番目の研究機関として設置されました．現在，20名程の専任研究員，客員研究員等も含めますと５，60名の体制で，体育・スポーツに関わる研究を，日夜推し進めているところです．本日は公開講演会という形式で，「スポーツでいかに国際貢献ができるか」という課題につきまして，その道のまさに最前線を走っておられるお２人，浦先生，そして岸先生をお招きしまして，先生方の先進的な研究成果をお示しいただきながら，広くこのテーマに関する知見を共有していこうという企画でございます．

本行事の企画にあたっては，専任研究員の小林先生が中心となって進めてくださいました．そして，日本スポーツ振興センターより著名な２人の先生方をお招きして講演を開催できることを，われわれ研究員一同，とても喜びに感じているところです．先生方，どうかひとつ，短い時間ではございますが，われわれに新しい知見を与えてくださればと存じます．私の挨拶はこれぐらいにいたしまして，早速，講演の方に移っていただきたいと思います．ありがとうございました．

小林　布目所長，ありがとうございました．それでは本日のプレゼンターのお２人をご紹介したいと思います．

まず皆様からごらんになりまして左側，日本スポーツ振興センター，岸卓巨さんでございます．大きな拍手をお願いいたします．岸さんは本学法学部在籍時，ファカルティ・リンケージ・プログラム――いわゆるFLP――で様々なご活動をされまして，卒業後，いったん大手学習塾に勤務しておられます．その後，2011年９月から２年間，青年海外協力隊員としてアフリカのケニアに赴任し，児童保護施設に勤務するかたわら，「スポーツを通じた子供たちの居場所づくり」をキーワードに，サッカークラブ，マリンディ・コミュニティー・ユーススポーツ・アソシエーションという組織を，現地のケニアの方々と一緒に設立されました．そのような一連の活動は，朝日新聞など各種メディアでも取り上げられております．その後，本学スポーツ政策研究科で研究を積まれ，現在は，独立行政法人日本スポーツ振興センターに所属しながら，今年度より本学の研究所の客員研究員としてもご活躍いただいております．よろしくお願いいたします．

続きまして，浦輝大さんでございます．浦さんは，1997年，日本体育大学社会体育学科をご

卒業後，翌年98年から2005年まで，日本社会人アメリカンフットボール，いわゆるＸリーグのオンワードでプレーをされました．その間，実業団日本一をはじめ，オールＸリーグ，オールジャパンチーム選出，２年間のアメリカプロリーグ所属などをご経験されております．その後，2006年から青年海外協力隊でバヌアツ共和国に体育隊員として派遣され，現地の小学校50校を対象に，巡回指導など精力的に活動されておりました．2009年，帰国後，ご出身が大阪なのですが，そちらで特別支援学級等の先生を務められまして，2010年から2011年には，イギリスのNGO団体に所属，デンマーク，アンゴラ等，数々の国でボランティア活動を展開されておりました．2012年から14年の３年間は，八王子市役所に籍を置きながら，JICA ── 国際協力機構 ── の国際協力推進員として，本学中央大学をはじめ，数多くの混合大学NPOと連携しながら，このような国際貢献の最前線にて活躍されてきております．2015年からは，スポーツ・フォー・トゥモロー事務局に所属されて，今はご多忙な日々を過ごしておられるということです．先生，どうぞよろしくお願いいたします．

今日は，大きく２部仕立てで考えております．まず第１部ですが，岸さんからスポーツ・フォー・トゥモローについてお話しいただきます．スポーツ国際貢献事業が ──「知らないうちに」というと怒られてしまうのですけれども ── 開始されております．簡単に言いますと，東京オリンピック誘致の際に，安倍首相は，東京をキャンディデートとして票を獲得しなければならない中で，国として非常に大きなミッションを立ち上げました．途上国を含めた世界に対してどのようにアプローチしていけるか，それに対して日本は中心的な役割を担っていくことができる，という旨の主張を世界へ向けて発信したのです．そのせいもあってか，めでたく東京オリンピックの誘致に成功したのですが，誘致に成功した以上，このミッションを達成しなければいけない．そのまさにコントロールタワーとして中枢におられるのが，今日，皆さんの目の前にいらっしゃるお２人でございます．

岸さんから前半30分程度お話をいただき，その後，具体的に実際の現場，スポーツによる国際貢献とはどのような感じなのか，ご関心をお持ちの方も少なくないと思います．浦さんからは，そのような実際の現場を中心にお話しいただこうかと思っています．最終的には６時ぐらいを目途に，本会を終われればと思います．第１部と第２部の間にこちらから皆さんにお聞きしますのでご質問，ご意見等おっしゃってくだされば と思います．このような流れで約90分になりますが，どうぞよろしくお願いいたします．

それではまず第１部，岸さんの方から，よろしくお願いします．盛大な拍手を．

岸　ご紹介をあずかりました，岸と申します．

ご紹介いただきましたように，私もこの学校を卒業しておりまして，単に勉強して卒業した以上に，この学校にいろいろなことでお世話になったと思っております．大学１年生のときには，夏の交換留学プログラムという中央大学の授業ではじめてイギリスに１か月以上行かせていただいたり，大学時代のゼミのつながりでバヌアツ共和国という国へボランティアに行ったりしたことが，現在国際的な仕事に携わるきっかけになっております．布目先生の授業を受けていたこともありまして，そのようなご縁で今日，このような場でお話しさせていただけることを，非常にうれしく感じております．ちなみに今日この後お話していただく浦さんですが，浦さんと初めて出会ったのもこの学校でした．そのとき私は経済学部で，ケニアでの活動についてお話をさせていただいたことがありまして，そのときに八王子のJICA事務所からいらっしゃったのが浦さんでした．このように中央大学には非常にいろいろなところでご縁をいただいております．

今日は，二つほどお話をさせていただきます．一つは，スポーツ・フォー・トゥモローという2020年に向けて取り組んでいるプログラムについて，何を目指そうとしているのかというところを私からお話しさせていただきます．次に浦さんから，スポーツを通した国際貢献の現場だと，どのようなリアルなことが起きているのかということをお話しいただくという流れで，進めさせていただけたらと思います．

まず2020年，オリンピック・パラリンピック．その時，皆さんは何をされているでしょうか．恐らくこの学校を卒業して，どこかに就職をし，もしかしたら日本にいない方もいらっしゃるかもしれません．今日は，2020年に向けて，日本政府として動きだしているプログラムということで，スポーツ・フォー・トゥモローについてお話をさせていただきます．

2020年の招致活動の中で，この写真を覚えている方もいらっしゃいますか．東京での開催が決定し，日本も歓喜にわいたかと思うのですが，この招致活動の裏で安倍さんが掲げていたプログラムが，このスポーツ・フォー・トゥモローです．「2014年から2020年までの７年間で，開発途上国をはじめとする100か国以上の国において，1,000万人以上を対象に世界のより良い未来のために，未来を担う若者をはじめ，あらゆる世代の人々にスポーツの価値とオリンピック・パラリンピックムーブメントを広げていく取り組み．このプログラムを政府として着実に実施していくことが，2020年東京大会に向けたわが国の国際公約の一つでもある」という形で，招致活動の中で掲げました．

特に覚えておいていただきたいポイントとしては，「100か国以上の国において1,000万人以上に」という部分と「スポーツの価値とオリンピック・パラリンピックムーブメント」という部分です．「オリンピック・パラリンピックムーブメント」と，聞かれたことがある方はいらっし

ゃいますか．（会場の参加者へ問いかけに対して）ありがとうございます．少しその部分からお話をさせていただきます．オリンピック・パラリンピックムーブメント，オリンピックといいますと，国際競技大会が，皆さんの中ですぐに思い浮かぶものかと思うのですが，このオリンピックというものは，実施する根拠として，オリンピック憲章というものがあります．その中には，オリンピックムーブメントの目的は，「友情，連帯，フェアプレーの精神を，スポーツを通して平和でより良い世界を作ることに貢献する」ということを謳っております．その友情や連帯，フェアプレーの精神を世界に広めていく，その手段がスポーツである．そのための場が４年に１度の大会だという，そのような位置づけになっています．オリンピックのムーブメントを世界に広げていくことが非常に大事なIOC国際オリンピック委員会のミッションでもあります．

スポーツ・フォー・トゥモローですが，オリンピックムーブメントやスポーツの価値を，100か国以上，1,000万人以上に広げていくという数値目標を掲げております．この数字，イメージはわきますでしょうか．例えば，中大杯は，何人の参加者がいらっしゃいますか．中大杯を何回やったら，1,000万人を超えますか．そのような，スポーツのイベントで集まってくる人の数などをカウントしながら，1,000万人に広げていこうという話で，日本スポーツ振興センターだけでこれを目指していても，到底達成できるものではありません．そこで，このプロジェクトを進めていくために，二つの観点で進めています．一つは，オールジャパンです．もう一つが，多方面からというところです．スポーツの価値とオリンピックムーブメントを広げていくという中で，三つの柱でこの事業を進めています．一つがスポーツを通じた国際協力および交流，もう一つが，国際スポーツ人材育成拠点の構築，三つ目が国際的なアンチ・ドーピング推進体制の強化支援，この三つの柱で，スポーツの価値を世界に広げていこうと進めております．はじめにこの三つについて，ご説明をさせていただきます．

皆さん，スポーツと言いますと，日本の政府の中で，どこの政府が一番なじみがありますか．恐らく，日本で学校体育などを司っているのは文部科学省です．ただ，この事業は国際協力というところですので，国際協力になりますと外務省が管轄の省庁になります．文科省と外務省が連携をして，この事業の中心となって進めていこうというところも，日本の中で，今までに無かった試みだと思います．今までですと，文科省は文科省で日本国内でのスポーツの普及や体育の促進をやっておりまして，一方で外務省は外務省で国際協力，外交を進めていたかと思うのですが，そこがタッグを組んで，日本のスポーツ文化を世界に発信していこうと，そのようなことを考えております．

この写真は，ブラジルのリオの大使館で行われた柔道教室なのですが，このような日本の大

使館は100か国以上にあります．100か国でスポーツの価値を伝えるというときに，大使館のネットワークは非常に重要なネットワークで，各国にあります日本の大使館でも，いろいろな行事が今，積極的に行われています．もう一つ，青年海外協力隊です．私も元々，ケニアで協力隊でした．このあと，浦さんの話でも，バヌアツで協力隊で活動していたときのお話をしていただきますが，この青年海外協力隊をスポーツ隊員，例えば体育を教えにいく隊員や，サッカーや野球，陸上，バレーボールを指導する隊員，いろいろな現場で必要なスポーツのユースプログラムなどを進めていく青少年活動，さまざまなスポーツ関連の隊員がいるのですが，スポーツ隊員をどんどん増やしていって，現地の人と一緒にスポーツを普及させていく，スポーツの現場を作っていくという形でも，この事業が進んでおります．

一つ目の柱は，運動会の輸出というところは，日本スポーツ振興センターが主導となって行っております．皆さん，運動会は日本にいるとなじみのあるものかと思うのですが，なかなか海外に行きますと，特に途上国ですと，このような運動会はないです．例えばサッカー大会や陸上競技大会，マラソン大会というような一つの種目，あとは子供だったら子供の大会，大人だったら大人の大会ということはあっても，１日にいろいろな世代の人たちが集まって，それぞれがパート・パートで参加しながらみんなでスポーツをやろうという場は，なかなか途上国ではないというところで，このような運動会を日本の文化として，海外に輸出していこうという事業もしております．最後に映像がありますので，その中でも運動会の現場の様子が出ております．ぜひごらんください．

二つ目の柱は，国際スポーツ人材育成拠点の構築というところです．特にこの部分では，筑波大学，日本体育大学，鹿屋体育大学というところで行っておりますが，スポーツアカデミーというものを建設しています．どのようなものかといいますと，海外からスポーツを学ぶ学生を，日本に招へいし，スポーツ界のリーダーを育てるという事業を行っております．今年も，筑波大学で修士プログラムが始まります．募集する学生の多くは，海外からの学生なのですが，日本人も募集しますので，皆さんも卒業した後に応募資格があるのかと思います．ちなみに，授業は全て英語です．日体大でもそのようなコーチの育成や，鹿屋体育大学でもスポーツアカデミーを進めております．

三つ目の柱がスポーツの価値を守るというところです．今，ニュースでも，例えばFIFAの理事の汚職の話やドーピングの話など，スポーツの価値を失うニュースが毎日のように聞こえてくると思うのですが，スポーツの価値を守るという部分で，特にアンチ・ドーピングというところで，日本アンチ・ドーピング機構というところがこの分野を推進しております．例えばアンチ・ドーピングの検査員を育てたり，アスリートがドーピングなどに頼らずにスポーツで

自分の力を発揮する精神，まさにプレイトゥルーという精神を共有するシンポジウムを開いたり，ワークショップを開いたりしております．このプレイトゥルーについては，大学の体育系でスポーツをやっている人たちでも，人ごとではないのではないかと思います．なかなか上を目指そうとすると，ちょっと薬に頼ってしまったり，途上国でよくあることは，賄賂を協会の関係者に渡して，自分が選手に選ばれるようにしたり，いろいろなスポーツの価値を失う事件が起きているかと思うのですが，そうではなくて，本当の意味でのプレー，スポーツの意味を発信していこうということを，日本から伝えていくことを実施しています．

このような三つの柱で行っておりますが，それをオールジャパンで取り組もうとしています．この中で関わってくる団体としては，例えば先ほど文部科学省，外務省を挙げさせていただきましたが，他にも日本スポーツ振興センター，日本オリンピック委員会，日本障害者スポーツ協会，オリンピックの後，パラリンピックが行われ，パラリンピックもパラリンピックのムーブメントを推進していこうというところですので，日本障害者スポーツ協会というパラリンピックを担っている団体も，このコンソーシアムに入っております．あとは日本アンチ・ドーピング機構，筑波大学，東京2020組織委員会，国際交流基金，JICA などが中心となって，この事業を推進しております．ただ，なかなかこの団体だけでも，100か国1,000万人というところは，達成することが難しいですし，日本の中でもムーブメントを作るにはまだまだ足りないということで，コンソーシアム会員を募集しています．そこでは，例えば大学さんや NGO，NPO，国内スポーツ関連団体，地方公共団体，民間企業，このようなところを会員として募集しまして，この事業を進めています．

例えば会員が実施する事業．この写真は，国際武道大学という大学が，JICA 東京という JICA で研修中の外国人を受け入れる研修施設があるのですが，そこで研修中の外国人に武道を紹介するという事業を行いました．例えばこの事業ですと，武道大学が持っている武道を教えられるというリソースと，JICA 東京という海外の人が集まる研修所というリソースを掛け合わせて，事業を実施しているというところになります．そのような実施している事業を，スポーツ・フォー・トゥモローの一環として運営委員会が認定をさせていただきまして，このようなことをやっていますと日本国内や海外に向けても発信していく．そのようなところが，われわれ事務局として課せられている役割ということになります．

先ほど小林先生から，招致活動の中で最後に使われたものが，スポーツ・フォー・トゥモローという切り札だという話があったかと思います．招致活動で日本としてやっていきますと宣言した以上，やっていますということを世界に伝えていかなければいけないということで，例えば国際武道大学だったらこのようなことをやっていますというところや，民間企業ですとこ

のようなことをやっています，NGOだったらこのようなことをやっていますと，海外に向けても，日本としてオールジャパンで取り組んでいますということを伝えている段階です．それぞれが持っているリソースを共有しているところです．他にも，例えばNGOと民間企業との連携ですと，ネパールで地震があったことはご存じかと思うのですが，ネパールで長年，野球を普及させる活動をしている，ネパール野球ラリグラスの会というNGOがあります．まさに野球の指導者をネパールに派遣しようとしていたときに地震が起きてしまいまして，地震で野球どころではないという状況になったのですが，その中でも現場のネパールの人々は，家が壊れていて毎日が大変な中でも野球をやるというシーンもあったようです．このラリグラスの会が，野球を通して復興支援をしていこうというプロジェクトを掲げまして，そこに民間企業のスポーツ用品メーカーのアシックスが，スポーツ用具を提供すると賛同して，この事業を一緒に推進していこうと，今のところ調整しております．

NGOといいますと，現地のニーズや，現地で長年スポーツ活動をしてきたネットワークがあります．一方で民間企業ですと，今，CSRとして，企業としてスポーツで国際貢献をしていこうと，企業課題として掲げている企業も増えてきております．そのような面で，現地のニーズを持っているNGOに，民間企業が資金面や用具の面で支援をするというような，マッチングの事例も起きております．各会員の持つリソースの共有，情報共有，マッチングを行うというところを，先ほどの図にありましたコンソーシアムというところで進めております．

そのコンソーシアムですけれども，今は64団体まで増えてきておりまして，スポーツ関連の団体だけではなくて，地方公共団体や民間企業，大学などもこのムーブメントに参画してきております．大学ですと大阪大学，鹿屋体育大学，共立女子学園，国際武道大学，桐蔭横浜大学，日本体育大学……．中央大学はまだですね．コンソーシアムの会員については，今，64団体まで増やしてきています．

スポーツ・フォー・トゥモローで何を目指そうとしているのか．スポーツの価値とオリンピック・パラリンピックムーブメントを広げるというところは，もちろんそうですが，スポーツでより良い明日を作るということで，例えば「運動会を１回やります」「セミナーを２回やりました」というだけでは，なかなか現場が変わらないと思います．持続可能性というところで，どれだけ現場の人たち，途上国の人たちの生活がこれによって変わるかというところが，非常に重要な部分になってきています．そのために，特に三つのことを重視しております．

一つ目が，意識を変えるという部分です．これは日本の人々もそうですし，途上国の人たちも，スポーツは単なる勝ち負けや，早い，うまいという部分の価値基準だけではなくて，スポーツで明るい未来を作れるのだという意識を持っていただくことによって，スポーツの価値は

より発揮されるのではないかと考えております．

二つ目は，仕組みを変えるというところです．なかなかイベントを１回やったというだけでは変わりません．そこで仕組みを変える．例えば体育の授業が行われていなかった学校で，体育の授業が行われるようになった．それが一つの学校だけではなくて，その国全体の学校で体育の授業が行われるようになったとしたら，単なる今までは，体育の時間が自由時間で遊んでいた人たちも，そこでスポーツを学べ，スポーツの価値に触れることが進むのではないかと考えております．政策を変えるというところも，今，目指しているところです．

三つ目は，国内外に仲間を増やすということです．日本だけではなくて，海外にもスポーツ・フォー・トゥモローを知ってもらいまして，その国でも１人がリーダーとなって，その人が周りの人たちにスポーツの価値を伝えていく．日本人発信だけではなくて，日本から受け取った人が，またその次の人に伝えていくという国内外に仲間を増やすところを，スポーツ・フォー・トゥモローでは目指しております．この写真は，ASEAN のスポーツの行政官，例えばスポーツ省で働いている人や，学校の体育のカリキュラムを作っているような人たちに日本に来ていただいて，日本で体育の授業や総合型地域スポーツクラブなど，日本のスポーツのシステムを見てもらうという事業を行った時の写真です．日本のスポーツのシステムを持ち帰ってもらって，海外で，自分たちでプランニングをして，それを日本としても支援をしていくという日本発信のネットワークを，海外の仲間を作りながら進めていこうということに取り組んでいます．

ではこのスポーツ・フォー・トゥモローについて，最後に映像を見ていただけたらと思います．

（映像再生）

岸　はい．ありがとうございました．私からは以上です．

小林　ありがとうございました．

それではここで，何かご質問等があれば受け付けます．挙手をお願いします．

参加者　お話，ありがとうございました．質問なのですけれども，岸さんが考える，人々に知ってもらうべきスポーツの価値とは何なのでしょうか．

岸　私が考える，人々に知ってもらうべきスポーツの価値．それを話すと，また１時間ぐらい必要ではあるのですけれども，簡単に一つ例を挙げて話しますと，今日の自己紹介の中でも，スポーツが一つの居場所になるというお話をさせていただきました．私の場合，ケニアで活動していたときに，ストリートチルドレンや犯罪に遭った子供たちが警察に連れてこられる施設で働いていました．そのような子供たちも，なかなか普段いる場所がないといったときに，安

心していられる一つの場所がスポーツのサッカークラブや陸上クラブでした.

あとはスポーツで人と人との関わり方を学ぶということがあると思います．普段，なかなか分かり合えない，宗教が違ったり，年齢が違ったり，性別が違ったりという人たちとも，スポーツの場に行けば分かり合えるところもあるのではないかと思います．特にその部分については，浦さんのお話なども出てくると思いますが，スポーツには本当にいろいろな力があると思います.

あとは日本の中でも，東日本大震災のときに，現場で活動した人というと，チームワークについて普段から考えているようなスポーツ系の人が多かったということを，ケニアに赴任する前に，南三陸で活動していて感じました．あとスポーツは発信力もあります．オリンピックもそうですし，スポーツのプレーヤーが世界に対して発信したことが広がっていくところも，まざまざと感じるところがあります.

参加者　ありがとうございました.

小林　よろしいですか．はい．他にどなたか.

では後ろの方.

参加者　お話，ありがとうございます．岸さんは個人的に，最終的に東京オリンピックはどうなってほしいですか．または，どうなっていきたいですか.

岸　ありがとうございます．どうなっていきたいか.

一つ，スポーツ・フォー・トゥモローとして目指しているところはあると思うのですが，私はもう一つ課題に思っていることは，日本での受け入れ体制かなと思っています．なかなか海外の人が日本に来たときに，自由に動きづらい部分が，今の社会ではあるかと思います．例えば電車の乗り方や，人々の対応という部分でも，英語が話せる人は増えてきていると思うのですけれども，外国人との接し方に慣れていなかったり，外国人の目線に立ったときに，なかなか分かりにくい部分が，日本社会にまだまだあると思っています．そのようなところで2020年，東京オリンピックを開催するときに，海外の人たちが日本に来て楽しめる受け入れ体制を作っていられたらいいなと思っています．そのためにもスポーツ・フォー・トゥモローで，いろいろな人が海外に行って自分が，「あれはちょっと難しかった」「こういうサービスがあったらいいのに」ということを自分で体験して，それを日本に持って帰ってきて，日本で実現することもあるのかと．世界に出ますと，日本を見つめる機会にもなると思います．そのような意味でも，日本の社会のシステムを変えていくことも大事かと思っています.

小林　よろしいですか．はい.

いったんここでご質問は打ち切らせていただきます．それでは次に，浦さんに第２部ご講演

いただいて，その後ディスカッションの時間に移りたいと思います．岸さん，ありがとうございました．大きな拍手を．

それでは浦さん，よろしくお願いいたします．

浦　皆さん，こんにちは．

一同　こんにちは．

浦　浦輝大（うら　てるひろ）といいます．今，小林先生の方からご紹介いただいたのですけれども，私は長くアメリカンフットボールをプレーしていたので，普段，話をするときに，「浦さん，アメフトの選手だったから，すごく豪快な人だと思っていたのですけども，話は意外と地味で暗いですね」というように，よく言われるのです．私自身も，特に体が丈夫なわけではなくて，それほど豪快な人間でもなくて，比較的内向的な性格です．それほど豪快な話ではないという前提で，皆さんに，私の話を聞いていただければと思います．32歳でアメリカンフットボールを引退して，何か役に立てればと思いボランティアに参加しましたが，２年間，結果的には何もできずに終わってしまったという若干の失敗談になりますけれども，それなりに学ぶべきこともあったと，皆さんにお伝えできればと思っています．

バヌアツ共和国は，ご存じの方，いらっしゃいますか，聞いたことがある方，意外とおられます．ありがとうございます．実は今日，紹介していただいた小林先生は，私より10年ほど前に，バヌアツ共和国でスポーツの協力隊員として活躍されておられました．JICA のボランティアでもバヌアツに派遣される人はそれほど多くないので，これも何かの運だと思います．バヌアツは人口23万人の南太平洋のとても小さな島です．場所としては，オーストラリアの右です．ニュージーランドの上にあります．面積は，新潟県と同じぐらいの面積で，人口23万．新宿の人口は31万人なので，新宿よりもう少し少ないぐらいの人口が，新潟県ぐらいの面積に住んでいると思っていただければと思います．そこで，体育の指導を２年間していました．

バヌアツは2005年まで，世界で一番幸せな国として有名でした．今はいろいろな指標が出ているのですけれども，一般的にブータンが有名ですね．その前は，バヌアツが世界で一番幸せな国と言われていました．その判断の仕方は，国民の総幸福度ですね．幸せだと，何％の人が言っているかです．恐らく日本はそのとき90位ぐらいだったと思うのですけれども，日本人の性格からして「幸せですか」と聞かれて，あまり「幸せです」と言う人は少ないと思うのです．そのような面では，日本のランキングは下がってしまっているのですけれども，それでも先進国の中では，相当高いランキングでした．幸せと言っている人のパーセンテージを，環境をどれだけ破壊しているかで割るのです．日本人がもし100％幸せと言っていても，われわれは相当

の環境破壊をしていて，今のライフスタイルは持続可能ではないということになってしまうと，幸福度は下がってしまいます．バヌアツの持続可能性とは，人が食べるよりもはやく食べ物が育つのです．基本的にタロやヤムやキャッサバという大きなお芋を食べているのですけれども，半分食べて，半分土に置いておくと，２，３か月で元の大きさに戻ります．そうしたらまた半分食べて，半分土に置いておけば，また戻ってきます．家族が増えれば，半分に割って２か所に置いておくと，倍々で増えていく．彼らの自慢は，平均労働時間１時間で一生食べていけるということです．

今から少し，５分間ほどのスライドショーを見てもらおうと思うのですけれども，最初に出てくるものは，チーフです．バヌアツの国の成り立ちからして，市や町などはほとんど成り立たなくて，一つの小さな村，100人から200人の村を，１人のチーフがまとめています．あとは一応，季節はあるのですけれども，雨が降る夏と雨の降らない夏……雨季と乾季で同じところで撮った写真が出てくるので，それを見比べてもらいたい．またうちの島だと１割ぐらいのところしか電気がないので，ほとんど電気を使っていないのです．お肉屋さんはどのようにマーケットでお肉を売っているかというと，朝一番に生きている牛の足を切って，殺してしまいます．内臓を切り出して，皮を全部はいで，丸裸にした牛をそのままマーケットに持ってきて，引っ掛けて，１日中削りながら売っているのです．ちょっとショッキングな映像かもしれないのですけれども，それがバヌアツでは普通なので，見ていただければと思っています．

ちなみに，私の話は全く難しい話ではないので，リラックスして皆さんに聞いていただければと思います．まず映像を見てください．

（映像再生）

浦　このような感じの国です．大体，皆さん，イメージはわきましたか．何か質問がある方はおられますか．どのようなことでもいいのです，もしあればお願いします．

小林　質問したい方は，所属と簡単に名字だけで結構ですのでお伝えください．

ホンダ　文学部の１年のホンダです．

チーフと呼ばれている人は，何人ぐらいいるのですか，全部で．

浦　ありがとうございます．

チーフは，うちの島は４万人から５万人の人口になるのですけれども，メインのチーフは25人ぐらいです．チーフは，家が４軒ぐらいでもチーフですし，20軒ぐらい集まっていてもチーフなので，それぞれチーフの定員は違うのですけれども，大体，みんなはちょっと偉くなると，「あの人，チーフだ」という感じで，全般的にいいかげんな国なので，たくさんチーフはいます．

ホンダ　分かりました．ありがとうございました．

浦　ありがとうございます．

では，ちょっと話を進めます．また後で，質問をぜひください．青年海外協力隊員のボランティアのクイズを一つ出します．もし周りに友達がいれば，話し合っていただければと思っているのですけれども．

皆さんは，釣りが上手です．釣りのスキルを持っています．釣りをしながら１年間かけて，世界一周旅行をしようと思っているのです，日本を出て，アジアを抜けて，インドを抜けて……というように．インドに行ったとき川沿いの村に，食べ物が無くて困っている村人たちに，皆さん，会いました．でもポイントは，皆さん，世界一周旅行の途中なので，インドには２週間しかいません．２週間後にはもう次，パキスタンに行くことになります．２週間でできる一番いい彼らの助け方は何でしょうという問題です．ちょっと，もし周りにお友達がいれば，１～２分ぐらいでお話をしてください．よろしくお願いします．

（間）

浦　もしボランティアで答えてくれる方がおられましたら，挙手していただければ．

お願いします．

参加者　釣りの仕方を教える．

浦　釣りの仕方を教える．皆さん，拍手を．ちなみに，ご存じでしたか．

参加者　いや…….

浦　今，考えられましたか．素晴らしい．あなたはぜひ協力隊に行っていただきたいです．まさしく大正解です．

JICA ボランティアは，日本の政府が行っている国際協力です．いろいろな国が国際協力をやっているのですけれども，日本のやり方は，魚を与えて１日を養うのではなくて，漁法を伝えて一生養う．そのようなボランティア，まさしく今，答えていただいたことです．食べ物を与えてしまったら，その人たちは難民になってしまいますけれども，くわを与えて農業の仕方を伝えれば，自立の道が開ける．その自立を助けることが日本の国際協力なので，ただ単にお腹が減って困っている人にお金や食べ物をあげてしまうと，その人たちは，元気になったとしても，ここで何か困っているふりをすれば，日本がずっと永久にお金と食べ物をくれるのだと思うかもしれません．すると彼らの人生自体も台無しにしてしまうかもしれないので，必ず自立を促すことが大事だというように言われています．

私の場合は，体育の隊員として行ったので，行く前に訓練所で言われたことは，「浦さん，小

学校で体育を普及するためにバヌアツに行ったら，現地の子供に体育を教えるでしょう」と言われたのです．「それはいいけども，結局，それを２年間やってしまうと，あなたのやっていることっていうのは，現地の先生が現地の子供たちに体育を教える機会を，２年間奪っているだけの，ただ単にあなたの自己満足です．あなたは楽しいかもしれないけども，それでは全く意味がない」と言われたのです．「２年間のうちに必ず現地の先生を巻き込んで，現地の先生と一緒に体育をやってください．そうすれば２年後帰国するときには，もう現地の先生だけで体育ができるでしょう．そしたら新しい隊員も行かなくてよくなるし，その人は，また他の困っている国に行くことができる．――技術移転というのです――必ず技術移転をしてください」というように，結構厳しく言われてバヌアツに行きました．

私自身は，アメフトを引退して，そのあとどのように生きていこうかと思ったときに，せっかく30過ぎまで健康でいられたので，人生の２年間ぐらいは，世の中のために働いてもいいのかなと思って，あとは自分自身が体育をやっていたので，体育によって規律や礼儀を教えられたらいいなと思って，やる気満々でバヌアツに行きました．行った先で驚いたことは，価値観の問題でした．バヌアツに行って最初に言われたことは，バヌアツの人に「日本人は面白いね」と言われたのです．例えば，皆さんのような学生だったら，毎日，英語の単語を覚えて，論文を書いて，いろんな文章を読んで，毎日まいにち，自分が成長して賢くなってくことが大切．社会人になったら，一生懸命働いて，今よりいい車を買ったり，大きな家に引っ越したり，人生ずっと成長していくことが，日本人にとって大切．それはすごくユニークな考え方だね．とバヌアツ人に言われたのです．

バヌアツ人が言うには，「僕たちは食べ物が豊富だし，みんな平等がいいから，昨日と今日，今日と明日，同じことが50年から60年ぐらい続いて人生終わるのが，一番幸せだと思ってるんだよ」と言われたのです．「なぜ日本では，昨日と今日が一緒だったら問題なの？それによって誰か悲しむ人だったり，困る人がいるの？　困る人がいないのに，なぜ毎日，そうやってみんなで競争して格差つけてるの？」と言われて，私の人生の選択肢の中に，人は向上するものだという，右肩上がりが前提だという考え方しかなかったので，こんな考え方の人がいるのだと思って，非常に驚きました．

逆に「向上心の無い人はばかだ」と，夏目漱石の……．これはとても日本人を象徴していると思っているのですが，私はこれが嫌いなのかといったら，実はこれも非常に好きで，やはり人とは成長すべきだと思っているのです．食べ物が豊富だからといって，例えば牛や動物のように，食べて昼寝してという人生は，非常にもったいないと思っていて，やはり成長したいという気持ちもあって，その両方の考え方が交わっていなかったので，私はバヌアツで非常に迷

いました．自分は何のために来たのかと思いましたし，どうしたものかと迷っていました．

先生たちに「体育を一緒にやってください」とお願いすると，先生たちは，１週目，２週目ぐらいは一緒にやってくれます．でも３週目ぐらいになると，木陰で見ているだけなのです．４週目，５週目になると，「あ，ウラが来た．おまえたち，体育行け」と言って，自分は教室の中から出てきません．それでも良い先生は，テストの答え合わせをしていたり，他の仕事をしてくれるのですけれども，悪い先生になると，家に帰ってしまったり，掃除洗濯したり，マーケットへ行って買い物をしてきたりするのです．全然悪びれなくて．「先生たちも，一緒に体育をやってください」と言うと，「日本の子供たちは，運動不足かもしれないけれども，バヌアツの子は，２時間も歩いてくる子供もいるし，授業が終われば海で泳いだり，ココナッツの木に登っているから，運動は足りてる．しかも暑すぎるし，道具は無い．日本はいいよね．夏，暑かったら，プールあるんでしょ．冬，寒かったら体育館があるんでしょう．バヌアツでこの炎天下の中，１クラス60～70人いるのに，ボールは１個しかないんだよ．こんな環境で１年間通じて，体育のカリキュラムなんて組めないよ」と言われたのです．

決定的だったことは，「自分たちが学生のときに体育は無かった．体育をやらないと立派な大人になれないというんだったら ── 当時，私と一緒に働いていた人たちは，大体，30歳ぐらいの先生が多かったのですけれども ── われわれ小学校の頃，全く体育やってない．でも今，こんなに幸せで充実しているんだよ．だから日本では体育必要かもしれないけども，われわれに押し付けないでくれ．君が教えたいんであれば，子供たち喜ぶから教えてくれてもいいけども，それはわれわれのライフスタイルじゃないんだ」と言われて，僕は非常に困りました．日本で思っていたイメージは，協力隊として現地に行ったら，現地の人たちがとても喜んでくれて，「ああ，日本から体育を教えてくれる人が来たんだ」と取り囲んでくれて，「教えて」「教えて」と言ってくれると思っていたのです．全くそのような状況にはならなくて，僕は非常に悩んでいました．

少し話が暗くなってしまったので，実際にどのような体育をやっていたか，皆さんに見てもらおうと思います．先ほども言ったように，道具が無かったので，最初はとても困って，ではハンカチ落としをやろうと思い，ハンカチ落としをやります．どういうことになったのかというと，Ａ君が自分の仲のいいＢ君にハンカチを落として，Ｂ君はまたＡ君に落としたのです．Ａ君は，またＢ君，Ｂ君はＡ君，ずっと２人でやってしまうのです．あとのクラスメートはそれを見て大笑いしているという体育になってしまった．悩んだ結果，全員に１から３番の番号をつけました．私が１と言ったら，１の人は全員立って，ハンカチ落としをやって全速で１周走って戻ってきて，自分のところに座ってください．その１周の間に，自分の前の人にタッチ

できたらその人をアウトにできるし，もし自分がタッチされたら自分がアウトになるので，タッチされた人は真ん中に集まって，誰が最後まで残れるかを決めましょうという，こんな感じです．

（映像再生）

浦　見て分かるように，みんな運動能力はとても高いです．日本と違うことは，体育の嫌いな子は，まずいなかったです．みんな，非常に体育は喜んでやってくれました．リレーは，こんな感じでした．よく「男の子が多いね」と言われたのですけれども，バヌアツは完全に男女平等なので，半分は女の子なのですけれども，子供ですからどちらか分からない子が結構多いです．うちの島だと，半分ぐらいがサンダルをはいて生活していて，半分ぐらいの子がはだしでした．でも体育が始まると，みんなサンダルを履いていることが面倒くさくて，よく脱ぎ捨てていました．そのまま忘れて教室に入ってしまうことが多かったです．

僕はこんな授業を，週５校，月曜日イサンゲル，火曜日ユウィンミット，水曜日ミドルブッシュ，木曜日イマキ，金曜日ポートレゾリューションと５校の学校に毎日行って，午前中，４時間体育をやって，午後に帰っていました．一つ困っていたことは，私が最初にタンナ島入ってから８か月間，日本人はその島に１人しかいなくて，全く現地語が話せなくて，若干，引きこもりぎみになっていました．そのときにとても助けてくれたのが，僕はいつも，12時に授業を終わると家に帰ったのですけれども，うちの家の裏にちょうど幼稚園があったのです．幼稚園の子供たちが，彼らも12時に授業が終わるので，終わると，日本人を見るツアーを毎日企画してくれて，うちに遊びに来るようになりました．気づいたことは，彼らとなら会話が通じるのです．なぜか私のつたないビシュラマ語を彼らは理解して，そのように動いてくれますし，彼らの言っていることも理解できるのです．非常に心もいやされますし，語学の習得にも役立ったのです．

今から見てもらうものは，毎日，うちに遊びに来ていたモシス，クウィンテル，クリンクリン，ナガムという４人の男の子が，うちの家の前で，当時，バヌアツではやっていたアップルパイの歌を歌っているのです．ただアップルパイと連呼するだけの簡単な歌なのですけれども，それを歌っているうちに，モシスとクリンクリンが非常に悪がきで，けんかになるのです．収拾つかなくなってしまったのですけれども，最後，どのように収まるかというと，私が午前中に体育の授業で使ったホイッスルを首から下げて，カメラを撮っていたのです．そのホイッスルにクウィンティルが反応して，「これ，ウラ，何なの？」と言って，それを取り上げてピーっと吹いたのです．あまりにもその音が大きすぎて，モシスがびっくりして半泣きになってしまうという映像なのですけれども，ちょっとかわいいので見てください．

（映像再生）

浦　これはモシスです．2008年なのですけれども，当時，彼は５歳だったので，もう今は中学生ぐらいになっていると思います．これは私が２年間住んでいた家ですけれども，ここでいつも子供たちと遊びながらいやされていました．

２年間の活動期間だったのですけれども，１年目が終わって一つ悩みだったことは，日本で一番やらなくてはいけないと言われていた，技術移転をすることが全くできなかったのです．先生たちの協力が得れなくて，時には上司から先生にレターを書いてもらってやるべきだと言ったり，時には校長先生に言ったり，先生たちと結構もめたりして１年間頑張ってみました．自分の中で，来年も同じように先生たちにやってもらえずにもう１年過ごしてしまうと，何も残せずに，何も結果を出さないまま，２年間，ただ単にいただけになってしまうと思って，非常に焦りがありました．先生たちも嫌いになってしまっていて，もう１年同じペースで進むと，多分，自分がバヌアツに来たことを一生後悔するのだろうと思ったのです．せっかくボランティアに来たのに，後悔だけはしたくないと思って，何とか自分のマインドを変えよう．しかも，変えないと自分自身がまったく体が動かないという，若干の引きこもり状態になってしまい，とても一生懸命考えました．

そのときに思ったことは，では，なぜバヌアツの人たちは，僕の言うことを，体育を一緒にやってくれないのかと考えたのです．そして気がついたことは，われわれは，日本にいると援助されることはないと思うのです．でも逆に，援助されている側の気持ちは，どうなのかと思ったのです．そのときにイメージしたことは，例えばタイムマシンができて，２・３百年先，2300年の人がぽんと2015年のわれわれのところにやってきたとします．彼らは言うのです．「あ，2015年の日本人って，平均寿命，たった85歳しかないの．がんもエイズも糖尿病もあって，君たち，たった85歳で死んじゃうのか．それってすごくかわいそうだ」という．「2300年は，がんは治療で完全に治るし，エイズは撲滅してしまったし，人の平均寿命は120歳あるんだよ．君たちは85歳で死んじゃうの，すごくかわいそうだから，僕たちが助けてあげるよ」と言われて，「じゃあ，体育をやりなよ．こういう勉強しなよ．こういうライフスタイルに変えなよ．そしたら平均寿命がもっと伸びて，もっと人生が豊かなものになる．今までのままじゃ，君たちあまりにもかわいそうだ」と言われたら，自分だったらどう思うかと，そのとき思ったのです．

僕は今まで40年以上，日本で生活してきて，日本がみじめだ，かわいそうだと思ったこともないし，とてもいい医療と教育を受けさせてもらって，とても恵まれていると思ったのです．では何がいけないかというと，勝手に未来の人が彼らの価値観と正義感で，タイムマシンを作って，われわれのところにやってきて，僕たちのことをみじめだと言うことがよくないのです．

彼らが帰ってくれれば，今までどおり2015年のわれわれで，プライドを持って生きていけると思うのです．そう思うと，それと全く同じことを私が日本から飛行機に乗ってバヌアツに行って，バヌアツの人たちは「十分に私たちは満足しているのだ」と言っているのに，こちらの基準で勝手に「君たちに良いことだから」ということで，私が体育を押し付けている．もしかしたら間違っているのは，自分の方なのではないかと，そのときに思いました．

日本からは，必ず技術移転してくださいと言われたのですけれども，今のバヌアツの体育に関していえば，たとえばもっと人の命に関わるようなことだったら違うと思うのですけれども，今のバヌアツの，私の行っていたタンナ島の体育に関していえば，まだ技術移転のレベルではないと決めて，２年目はもう技術移転はしないと決めました．だから非常にすっきりして，楽しく子供たちに授業をすることができました．２年間が終わって，最後に帰国の報告会があります．そのときに，私を日本から呼んでくれたバヌアツの政治家の人や偉い人たちに，最後にプレゼンします，どのような活動をしたか．そのときに言ったことは，「２年前に体育の先生を育ててくださいと言われて活動したのですけれども，結果的には１人も体育の先生を育てられませんでした．体育の授業も，私が帰ったら恐らく続かないと思います．せっかく呼んでもらったのに，すいませんでした」というように，私が言ったのです．

そうしたら，現地の偉い人たちが言ったことは，「ああ，ウラ，実は僕たち，体育なんて最初からどうでもよかったんだ．なぜ日本から人を呼んだかというと，僕たち日本人が好きで，日本人に興味があって，日本から誰か来てほしかっただけなんだ．たまたまウラが体育で来たから体育をやっててもらったけど，別に看護婦さんでも，井戸掘りでも算数の先生でも誰でもよくて，誰かに来てほしかった．それでいうとウラは，僕たちのことを絶対ばかにしなかったし，同じような服を来て，同じようなぼろぼろの家に住んで，同じようなものを食べて，一教員として一緒に働いてくれた．だから体育のことなんて気にしないで，おまえは胸を張って日本に帰るべきだよ」と言ってもらったのです．

そのとき非常に自分が反省したことは，やはり自分は日本人だから，２年間そこにいたら，必ず現地のレベルを上げて，必ず結果を残さないと，自分が行っていた意味がないというように勝手に自分で思い込んで，２年間，とてももがいていたのですが，現地の人たちは，最初からそのようなことは全く気にしなくて，純粋に僕のことを好きでいてくれたということをそこで学ばせてもらって，やはりバヌアツは，世界で一番幸せな国だと思いました．それをまとめた映像が，最後５分間ありますのでそれを見ていただいて，今日の僕のお話を終わろうと思います．

（映像再生）

浦　以上になります．皆さん，ご清聴，ありがとうございました．

小林　浦さん，どうもありがとうございました．

それでは浦さん，第１部を担当してくださった岸さん，どちらへでも結構ですし，付随するどんなことでも結構です．ご質問のある方，遠慮なく挙手をしてご質問をいただければと思います．

シンボリ　経済学科１年のシンボリです．

ちょっと国際貢献とは違うのですけれども，授業でドーピングの話に触れまして，アスリートの人たちのドーピングは，結構抜き打ちで身体的負担といいますか，負担がアスリートの人たちに強烈に来ているということを授業でやりました．アンチ・ドーピングという面の弊害を，岸さんに．

岸　はい．ありがとうございます．

そうですね．検査をする中で，いろいろな弊害が出てきているかとは思います．あとは例えば人権的な部分で，本当に尿の検査をするときも，トイレでおしっこをするときまで見られて，そこでおしっこをして検査をするという部分もあります．アンチ・ドーピングを守っていくために弊害になっている部分は，おっしゃるようにいろいろあると思います．

ただ一方で，それを守らないことによる弊害もあると思います．ドーピングをしてしまった人を許しているというところですと，元来のスポーツで自分の力でやってきている人たちの頑張りが発揮できなかったり，バランスについて考えながら，アンチ・ドーピングの検査をする部分での弊害を減らしていくことが必要かなと思います．

その部分で例えば，ドーピングですと薬のことなので，直接的ではなくても，医薬業界も巻き込んで，大会の運営システムなど，いろいろな面からアプローチしながら弊害をいかに減らしていくか，今，考えている状況です．

シンボリ　ありがとうございます．

小林　他にございますでしょうか．

キクチ　文学部１年のキクチと申します．

岸さんに質問なのですが，スポーツ・フォー・トゥモローの活動の中で，100か国以上，1,000万人以上を対象にという話は，恐らく海外に向けてということがメインだと思うのです．逆に，日本国民，一般市民に対するスポーツムーブメントなど，そのようなものは無いのですか．

岸　はい．おっしゃるとおり，100か国以上，1,000万人以上というときに数える対象は，海外の人となっています．ただそれを担っていくのは日本人ですし，このムーブメントも日本人の

理解なしには進められません．一方で，スポーツ・フォー・トゥモローとは別に，オリンピックの関連の事業としては，いろいろなことが起きています．先ほどお話ししましたオリンピックのムーブメントを日本人も理解するというところで，オリンピックのムーブメントを小中学校の体育の中で教えたり，大学生の中でも，例えば先ほどのアンチ・ドーピングを普及させる啓蒙活動に参加したり，日本人を対象とした事業も，幅広く今行われているという状況です．

キクチ　ありがとうございました．

小林　「自分はこれからどうすればいいのですか，スポーツで何かしたいのですけれども」と，そのようなたぐいでも全然よろしいかと思います．今日，浦さんがご自身の経験に引き寄せて，いろいろと皆さんにご説明くださいました．そのようなこともぜひご遠慮なく，限られた時間ですけれども，発言していただければ幸いです．どなたかいらっしゃいますか．はい．ではそちらの方から．

ヨネクラ　法学部２年のヨネクラと申します．

浦さんに質問したいのですけれども，先ほどバヌアツは，季節が乾季か雨季の２種類というお話をいただいたのですけれども，雨季で雨が降ってしまったときに，スポーツをしようとすると，どのような環境ですることになるのかと疑問に思って．

日本だと雨が降ったら，学校でしたら体育館などとなると思うのですけれども，先ほど写真を見せていただいたときに，やはり日本のような設備が整っているわけではなさそうだと思ったので，そのような施設の面も含めて，雨季にどのようなスポーツをしていたのかという点について教えてください．

浦　はい．ご質問，ありがとうございます．

雨季は，バヌアツ協力隊員に言われたことは，足りていないものは道具ではなくて，われわれの想像力とイマジネーションだと言われていて，限られた道具でいかに授業を作っていくのかがとても大事で．もう一つのポリシーは，今あるもので何とかするなので，今，そこにあるもので何とかするということです．基本的に雨が降ってしまうと，私はよく教室に入ってやっていたことは，算数のようなことをやっています．体育ではないのですけれども，よく日本で手遊びで「一二三の二の四の五，三一二の四の二の四の五」とやりますね．あれを体育の授業の中に入れていたのです．そんなことをやっていると，例えば体育の授業はあまり関心を持ってくれない女性の先生なども，手遊びの算数の数のカウンティングなどは興味を持ってくれたので，よく教室に入って，そのような体育以外のことをやっていました．体育は，自分のやっている以外のこともしていいという自由度がある．しかし決定的な面では，バヌアツは基本的に雨が降ると学校に来なくていいという国なので，雨が降ったら子供が少なくて，教室に入っ

てよく一緒に遊んだりしていました.

はい．ありがとうございます.

小林　はい．では他の方．はい．そちらの方.

タダ　法学部２年のタダといいます.

浦さんに質問なのですけれども，まず，なぜバヌアツを選んだのかということが一つと，現地で，語学で苦労されたという話でしたが，出発前に何か語学学習はされていたのでしょうか.

浦　JICA の協力隊は，行く前に約70日間の語学研修があって，例えば中学校で習う英語の授業数と同じぐらいの時間を70日間で学びます……結構詰め込みなのですけれども．バヌアツの場合は，日本で，ビシュラマ語という言葉なのですけれども，バヌアツは．ビシュラマ語を習うことができないので，日本で英語を習って，現地に行った後に英語とビシュラマ語を話せる人に，語学の研修を受けていました．基本的に英語とビシュラマ語は近いので，恐らく皆さんも行けば，２，３か月でビシュラマ語は，それほど苦労せずに話せると思います.

バヌアツを選んだ理由は，協力隊に行くときに，三つぐらい自分の行きたい国が選べるのです．私は行きたい地域は特に無くて，とりあえず協力隊に行って，どこでも行きたいと思っていたので，応募用紙に「どこでも行きます」と書いていたのです．ですから JICA の方が，この人はどこでも行くといっているので，どこに置いてもキャンセルしないだろうということで，バヌアツになったのかと思っています．特に選んだわけではありません.

タダ　ありがとうございます.

小林　他には誰か．では小峯先生.

小峯　中央大学の小峯です.

今日は，岸さんの最初のお話は，オリンピック・パラリンピック，これから日本も2020年に向けて，どのようなオリンピックムーブメントを起こすか．もっと成長して広く面を作っていって，もっと国民全体でオリンピックムーブメントをどう作るかという成長戦略の話．もう一つの浦さんの今日の話は，そのような成長していく中でも，本質は何なのか．バヌアツの国のいろいろなものを通じて，競い合うことを超えた体育の本来のあり方は何なのか．スポーツは何なのかという原点を見つめ直す．浦さんが日体大でいろいろな教育をされたことを，その価値観で日本を出て，バヌアツという国でそれを試そうと思ったら，その価値観は日本独自の価値観であって，インターナショナル，国際スタンダードではなかったということに気づいた．非常に岸さんと浦さんの，いろいろな意味で，日本スポーツ振興センターという同じ組織の中にいらっしゃりながら，何か岸さんと浦さんのお話を両方聞いて，これからの2020年，日本はどのようなオリンピック・パラリンピックを作ったらいいのか，今日はとても考えさせられま

した.

最後に質問なのですが，岸さんは中央大学ご出身ということなので，岸さんがもし今，中央大の学長だったら，この学生たちに，オリンピック・パラリンピックにどのような関わり方をされればいいと，そもそもうちの出身者として母校にどのような関わり方をしてほしいのかということを，教えていただきたい．また日体大出身の浦さんは，世界の，バヌアツの，勝利至上主義といわれるオリンピックがこれから盛り上がっていくには，そもそもどのようなオリンピックが本来，原点はどうあってほしいか，中央大学がどうあってほしいかなどというところも，もしお立場を超えてお話ししてくださったら，教えてもらいたいと思います．よろしくお願いします.

岸　ご質問，ご意見，ありがとうございます.

手短に，もし私が学長だったらというところで，なかなか大きな質問で，どう答えたらいいかというところもあるのですが，一つは，私も今，日本スポーツ振興センターというところでオリンピックに関わっておりますが，オリンピックは，４年に一度の大会だということが，私も今までの感覚でした．そして，関わり方としては見に行く，テレビで見るという部分しかないなという感覚でした．ただ，今，オリンピックの関連事業に関わっていますと，一人ひとりの関わり方はいろいろあると思います．例えば協力隊で海外に行ってみるというところでも，今のこの事業では一つのオリンピックムーブメントの参加の方法だと思います．何かサークルをやっていることがあれば，それをオリンピックと絡めて盛り上げていくこともあると思います．今，皆さんの中に，どのような方がいらっしゃるのか分からないのですが，今，やられていることとオリンピックの接点を，ぜひ見つけていただけたらと思います．その後ろ盾を，大学として作れればいいのではないか．接点を見つけるという部分では，私が今の立場からお手伝いできることもあるのではないかと思います．ぜひこの後の時間でも，オリンピックと皆さんの活動の接点を見つけていただけたらなと思います.

浦　小峯先生，ご質問をありがとうございます．私が思っていることは，今まで競争で，１番になることがいいと，政治でも経済でもスポーツでも，ほとんど何でも１番になることがいいという，アメリカに付いてきた日本だと思うのです．そろそろ成熟していくと，１番にならなくても，今持っているもので十分幸せになれるのではないかという価値観を最近持っていて，もちろんオリンピックは，今までどおり競争でいいと思うのです．でも，スポーツ・フォー・トゥモローは競争ではないスポーツで社会を良くしていく．たとえば健康だったり，年配の方のスポーツだったり，そのような面で，スポーツが生かされたらいいと思っています.

中央大学の方にアドバイスといいますか，メッセージは，私は日体大なので賢くないです.

結果的には，国の政策やトップレベルのことには，一生，関わることができないと思うのです．その代わりメダルを取れる人は，日体大にも結構いるかもしれません．ですからみなさんにはぜひ，私が頑張っても行けない政策の方に行っていただいて，もっとスポーツが日本という国で普及するように，皆さんに活躍していただけると，私にはできない部分が，うまく組み合わさっていいのかと思っております．はい．以上です．

小林　それでは時間も定刻を過ぎておりますので，次で最後の質問にさせていただきます．どなたか．はい．

サイトウ　こんにちは．法学部１年のサイトウと申します．

今日は，お２人ともお話をありがとうございました．私はスポーツを通じた交流は，最初，岸さんもおっしゃっていたように，１回だけのイベントで，表面的で一方的なものになってしまうのかなと感じていたのですけれども，そうではなく，内面的な相互的な理解を与えるものだと知りまして，スポーツは大きな可能性を秘めた，とても偉大なものなのだと感じました．本当にありがとうございました．

私から質問ではなく，提案といいますか，お願いがあるのです．私は今日，体育のクラスメートたちと一緒に参加しているのですけれども，実はクラスの３分の１程度しか参加できていないのです．そこで，このようなお話を聞ける機会はなかなかありませんので，みんなにもぜひ聞いてほしいと思うのです．申し訳ないのですけれども，岸さんと浦さん，もう一度，講演会を開いていただけませんか．その際には，ぜひ体育の授業のゲストスピーカーとしてお願いしたいのです．

小林　何の授業が教えて……いや，種目などを．

サイトウ　水曜日のバドミントンです．その際には，水曜日，バドミントンだけではなく，バレーボールとバスケットボールの授業もあると思うのですけれども，村井先生と小林先生がもしよろしければ，三つのクラスを合同で，講演会の授業を７月中にお２人にお願いしたいと思うのですけれども，ぜひご検討をお願いいたします．

岸　ありがとうございます．その積極性に，とても感銘を受けました．このような話をさせていただいたときに，「もう来なくていいよ」と言われることが一番寂しいので，また来てくださいということは，非常にうれしいと思います．ぜひ具体的な部分は，また先生方を含めて，相談させていただけたらと思います．

サイトウ　ありがとうございます．

小林　よろしいですか．

今，彼女がおっしゃったことが，恐らく今日ここにいらっしゃる多くの方に共有していただ

いたお気持ちだとよいなと，これを企画した保健体育研究所としましては切に願う次第であります．まだまだ話は尽きませんが，６時を回りましたので，本日の2015年度保健体育研究所公開講演会は，これにて終了させていただきます．なお，お２人には，スポーツ・フォー・トゥモローのステッカーと簡単なパンフレットを――数に限りがあるのですが――お持ちいただいております．これは東京オリンピックに向かって，どんどん盛り上がる事業であることは間違いない．関心のある方は，１人１部ずつ，前の方よりお持ちいただければと思います．

それでは今日，長い間，貴重なお話をしていただきました講演者の岸さん，浦さんに，盛大な拍手をお送りください．どうもありがとうございました．

演者プロフィール：

岸　卓巨（きし　たくみ）**氏**

中央大学法学部卒業，中央大学総合政策研究科修了．大学時代よりスポーツを通じた国際協力活動に参加．大学卒業後は，大手教育系企業に勤務した後，2011年９月から２年間青年海外協力隊としてケニアに赴任．児童保護拘置所で勤務する傍ら，青少年の社会参加を目的としたサッカークラブMalindi Community Youth Sport Associationを地元住民とともに設立．現在は，スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局にてプロジェクトマネージャーとして，スポーツを通じた国際協力に興味を持つ団体の事業立案などを支援している．

浦　輝大（うら　てるひろ）**氏**

1997年日本体育大学卒業．その後2006年まで９年間アメリカンフットボールの選手として日本とアメリカで活躍．引退後は青年海外協力隊として南太平洋のバヌアツ共和国タンナ島にて体育授業の普及活動に携わる．帰国後はイギリスのNGOに所属し，西アフリカのアンゴラ共和国にある教員養成校にて体育授業の技術移転を行った．2012年～2014年は国際協力機構（JICA）の東京都国際協力推進員として東京都多摩地区を中心に活動．2015年３月よりスポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局勤務．

小林　勉

中央大学総合政策学部教授